

TOBUNKEN NEWS

2012
no.48



独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

タイ・アユタヤ遺跡群 における洪水被害調査

2011年11月28日～12月3日、および
12月18日～23日の2次にわたり、文
化庁委託事業によるアユタヤ遺跡群での洪水被
害調査を実施しました。9月来の異常な豪雨と
長雨の影響によって、アユタヤやバンコクで大
規模な洪水が発生したことは日本でも大きく報
道されました。世界遺産に登録されているアユ
タヤ遺跡群も広範囲にわたって水没し、その保
存への影響を懸念したタイ政府とユネスコバン

コク事務所の要請に基づいて、緊急支援事業と
して専門家による実地調査が急遽決定されま
した。

第1次調査では水害対策および文化財保存の
2名、第2次調査では保存科学、壁画、建築、
写真の各分野から6名の専門家を派遣し、タイ
文化省芸術局および日本国文化庁の専門家たち
とともに、主な遺跡の被害状況を実地において
確認しました。

その結果、浸水は相当な規模に及び、これに
よる一部壁画の汚損や局所的な塩類析出、露出
展示遺構の水没などが生じているものの、遺跡



寺院遺跡の洪水被害（壁に泥が付着した範囲が最大浸水位を示す）



浸水によって下部が汚損した壁画の例

への直接的被害は限定的かつ比較的軽微なものが大半であることを確認しました。しかし、煉瓦造の仏塔や祠堂などの経年による劣化や変形等は随所で認められ、中長期的な計画に基づく継続的なモニタリングや保存修復の実行が災害時の被害軽減にとっても重要であることが改めて認識されました。タイ当局によるこうした活動をいかに支援していくかが、今後の課題となります。

(文化遺産国際協力センター・友田正彦)

文化遺産国際協力コンソーシアム シンポジウム「文化遺産保護を危機 から救え～緊急保存の現場から～」

10月16日に、一般の方々を対象に、自然災害により被害を受けた文化遺産の緊急保存に関するシンポジウム「文化遺産



パネルディスカッション風景

産を危機から救え～緊急保存の現場から～」を東京国立博物館平成館大講堂にて開催しました。

基調講演には、近藤誠一文化庁長官をお招きし、東日本大震災による文化財の被害状況と文化財レスキュー事業を中心にお話いただきました。続いて、大和智文化庁文化財鑑査官、日高真吾国立民族学博物館准教授、宮崎恒二東京外国語大学理事、フランスのNGOである「国境なき文化遺産」のアンリ・シモン代表より、それぞれご報告いただいた後、「文化遺産への緊急対応の課題」と題したパネルディスカッションを行いました。

講演内容は、阪神・淡路大地震および今年の東日本大震災によって被害を受けた建造物、民俗文化財、文字文化財等の復旧事業から、海外の文化遺産への支援まで多岐に及びました。緊急的な文化遺産復旧に関する議論を通じて、日本の被災文化財保護の経験を活かし、今後とも被災文化遺産保護のための国際的取り組みに協力していくべきであることが確認されました。

(文化遺産国際協力センター・原田怜)

無形民俗文化財研究協議会 「震災復興と無形文化」の開催

12月16日、第6回目を迎える無形民俗文化財研究協議会が「震災復興と無形文化—現地からの報告と提言」のテーマで開催されました。

昨年3月の大震災以降、各地で被災地の文化を守り伝えるべく様々な活動がなされてきました。しかし震災後数か月が経っても、無形文化財とその復興については課題や情報が十分に共有されてきたとは言えない状況にありました。そこで無形文化遺産部では、震災後の無形の文



発表の様子

化や文化財について継続的なテーマとして取りあげていくこととし、本年はその1年目として、現地で今何が起きているのか、何が課題なのか、それを共有し、問題提起と情報発信の場にすることを目指しました。

会では、震災以前から被災地域で活動してこられた先生方、積極的な後方支援活動や復興活動を展開している先生方5名にご発表をいただき、また、研究と行政の立場からそれぞれ1名ずつのコメンテーターをお願いしました。様々な立場の方々にお話をいただいたことで、多くの問題について多様な角度からの問題提起ができたのではないかと思います。印象深かったのは、テーマが「震災」だったにも関わらず、中心的に話し合われていたのが、実は震災以前からの課題であったことです。例えば民俗文化を保護するとはどういうことか、後継者不足や地域コミュニティの縮小とどう向き合うのか、無形の文化財行政の制度的問題、また、民俗芸能や宗教・信仰など無形の文化の持つ力や本質的意義についてなど。震災という巨大な非日常が、暴力的な形で日常の様々なひずみや、ものの本質を焙り出したとあってよいと思います。特に今回は、原発問題に揺れる福島からも発表者にお越しいただきました。同じ被災地という言葉で括られても、岩手・宮城県と福島県の状況

は全く異なります。私たちはいまだに、フクシマの復興について語る言葉をほとんど持っていない。原発という、本来人間の力でコントロールできないものが、地域の文化からまったく切り離された形で抱え込まれていたという現実が、ここに改めて示されたといつてよいでしょう。

無形文化遺産部では、引き続き、震災復興と無形文化をテーマとして取り上げることで、情報発信と共有の役割を担っていきたいと考えています。なお本協議会の内容は、2012年3月に報告書として刊行する予定です。

(無形文化遺産部・今石みぎわ)

泰西王侯騎馬図屏風の光学調査

企 画情報部と保存修復科学センターでは平成22-23年度にかけて、サントリー美術館所蔵の泰西王侯騎馬図屏風(重要文化財)の光学調査を実施しました。泰西王侯騎馬図屏風は桃山時代の初期洋風画の傑作として知られています。4人の王侯の騎馬姿が大きく描かれた四曲一双の屏風で、神戸市立博物館に所蔵されている泰西王侯騎馬図屏風(重要文化財、現在は四曲一隻)とともに、もとは会津藩若松城(鶴ヶ城)の障壁画であったと伝えられています。しかし、この屏風の制作経緯については不明な点も多く残されています。今回の光学調査では、高精細カラー画像、近赤外線画像、蛍光画像、エックス線画像の撮影を行い、描写や彩色に関する詳細な調査を実施するとともに、蛍光エックス線分析により彩色材料の特定を行いました。その結果、両作品に使われている絵具は日本画に用いられる顔料が中心であるが、背景の金箔材料が両方で異なっていることなどが明らかになりました。調査結果の一部は、サン



サントリー美術館での蛍光エックス線分析による調査の様子

トリー美術館で開催された特別展「南蛮美術の光と影、泰西王侯騎馬図屏風の謎」（2011年10月26日～12月4日）の展覧会場でパネル展示しました。

（保存修復科学センター・早川泰弘）

アゼルバイジャン国立美術館 所蔵日本関係美術品調査

11月27日から12月6日の日程で、独立行政法人国際交流基金文化協力事業として、アゼルバイジャン国立美術館所蔵日本関係美術品調査を行いました。アゼルバイジャンは、1991年に旧ソ連邦から独立した国で、首都バクーはカスピ海西岸に位置し、旧市街には世界遺産に登録された中世の建造物も遺されています。アゼルバイジャン国立美術館（Azerbaijan State Museum of Art）は、1920年にバクーに設立され、国内をはじめロシア・ヨーロッパの絵画・彫刻作品を中心に所蔵・展示

を行っています。所蔵作品の中に、日本や中国の東洋美術の作品、300点ほどが含まれていましたが、同館には東洋美術の専門家がおらず、日本の美術作品と、中国やその他の地域の作品との判別もつきかねる状況でした。そこでこのたび国際交流基金文化事業部生活文化チーム越智彩子氏とともに、秋田市立千秋美術館の小松大秀館長と江村が同館を訪問し、作品の調査と展示・管理についての助言を行いました。その結果、今回調査した約270点の作品のうち、80



アゼルバイジャン国立美術館

点余の日本美術作品（陶磁器・彫刻品・漆工品・金工品・染織品・絵画・版本）が含まれることが判明しました。今回調査した作品の大半は、19世紀後半から20世紀前半にかけて、日本および中国から海外に輸出された陶磁器で、稀少性はさほど高くないものの、このような輸出陶磁器のコレクションの存在が判明したことは重要な意味をもっています。調査データの整理が完了次第、調書を翻訳して同国に提供する予定で、同国における日本文化の理解に役立ててもらおうとともに、日本国内の輸出陶磁器研究においても未知の在外作品所在情報として活用されることが期待できます。

滞在中には在アゼルバイジャン日本国大使館を訪問し、特命全権大使・渡邊修介氏に面会し、今回の調査を二国間の文化的交流の好機としたというお話がありました。また二等書記官で本事業担当者の小林銀河氏をはじめ大使館職員の方々のご尽力により、終始円滑に作業を進めることが出来ました。2012年は、日本と同国との国交樹立から20年の節目の年にあたり、同美術館と在日本大使館を中心として、記念の展覧会を企画する動きも出てきています。こうした両国友好の企画をはじめ今後の活動においても、たいへん有意義な調査となりました。

（企画情報部・江村知子）

無形文化遺産保護条約 第6回政府間委員会

無形文化遺産保護条約第6回政府間委員会は、去る11月22日から29日の1週間、インドネシアのバリ島ヌサドゥア地区のバリ国際会議センターにおいて開催され、東京文化財研究所からは、無形文化遺産部の宮田繁幸・今石みぎわ、企画情報部の二神葉子の3名が参加



無形文化遺産保護条約第6回政府間委員会

しました。今回の会合では、緊急保護一覧表に11件、代表的一覧表に19件の新たな無形文化遺産の記載が、また推奨保護計画として5件の登録が決定されました。日本からは、代表的一覧表への推薦済み案件のうち、6件が審査され、「壬生の花田植」、「佐陀神能」の2件が記載、「本美濃紙」、など4件は情報照会の決議がなされました。この情報照会という手続きは、今回の委員会から運用が始まったもので、補助機関が記載・不記載の勧告をするのに申請書の情報が不足である場合になされる勧告です。今回は初めてということもあり、この情報照会の是非を巡り、個別案件ごとにかなり議論が展開されました。また、一昨年度から問題とされている、申請書処理数の制限、各国申請件数のシーリング、専門家による諮問機関の導入の是非、等に関しては、昨年まで以上に委員国間の意見対立が大きく、いくつかの議題では今までにない多数決投票による決定にまで至りました。本格的な運用開始から3年あまりで、無形文化遺産保護条約は大きな転換点に来ている状況を如実に表したものだといえるでしょう。日本国内でも関心が高い問題であり、また無形文化遺産分野での国際交流を進めていく上でも、今後ともこの動向を注視していくことが必要です。

（無形文化遺産部・宮田繁幸）

無形文化遺産部公開学術講座 「東大寺修二会（お水取り）の記録」

第6回無形文化遺産部公開学術講座が10月22日に東京国立博物館平成館大講堂で開催されました。

今回の講座では、無形文化遺産部が所蔵する無形文化財関連の資料の中から、東大寺修二会（お水取り）の録音記録を取り上げました。1967年から継続的に行われた調査の過程で蓄積されてきた東大寺修二会の現地録音は、10インチのオープンリールだけでも約400本にも上る膨大なものです。1960年代から90年代にかけて修二会に参籠されていた橋本聖圓師（東大寺長老）と、調査で中心的な役割を果たされた佐藤道子氏（東京文化財研究所名誉研究員）



展示会場の様子



公開学術講座プログラム

との対談の合間に、そうした録音記録の一部を紹介しました。また、平成館小講堂では東大寺修二会に関連する珍しい資料の展示を併催しました。一般参加者は200人を超える盛況で、アンケートでは展示ともども大変な好評をいただきました。

橋本聖圓師と佐藤道子氏の対談では非常に興味深いお話をうかがうことができました。今年度の無形文化遺産部の報告書に、その内容を掲載する予定です。

（無形文化遺産部・飯島 満）

第45回オープンレクチャー 「モノ／イメージとの対話」の開催

企画情報部では、日々の研究の成果をより広く知っていただくために、所外の方々に向けたオープンレクチャー（公開学術講座）を毎年秋に開催しています。45回を数える今回は、新たに「モノ／イメージとの対話」と銘打ち、動かぬモノでありながら人々の心の中に豊かなイメージを育む文化財の諸相をめぐって、所内外の美術史研究者4名が11月11・12日の両日にわたり当研究所のセミナー室で発表を行いました。

11月11日は「日本美術史における様式の複線性—様式の選択と編集」というテーマのもと、当部研究員の皿井舞が「平安時代前期から後期へ—六波羅密寺十一面観音像の造像」、東京工業大学大学院准教授の高岸輝氏が「鎌倉時代から室町時代へ—中世やまと絵様式の源流と再生」の題で発表しました。“様式”という美術史ならではの概念をキーワードとしながら、皿井はとくに制作背景との関わりから10世紀半ばという様式過渡期の造像について考察し、また高岸氏は平安末期から室町期の絵巻を通し

て、やまと絵様式の流れを重層的にとらえる自論を展開されました。

12日は「古美術のコンセプト」というテーマで、当部広領域研究室長の綿田稔が「室町漢画の基盤一周文と雪舟の場合」、町田市立国際版画美術館の佐々木守俊氏が「平安～鎌倉時代の印仏一スタンプのほとけ」と題して発表を行いました。造形的な面ばかりが語られがちな古美術ですが、綿田は雪舟筆「秋冬山水図」（東京国立博物館蔵）やその師である周文の作品を、佐々木氏は仏像の内部に納入された印仏を対象に、それぞれ当時の制作状況や機能に照らしながら、今日ではすっかり忘れられてしまったそれらの“コンセプト”をあぶり出しました。

今回は各日128名、108名と例年にも増して多くの方々が受講され、会場は満席状態でした。いずれの発表も各研究者の最新の研究成果を報告したものでしたが、学会レベルの内容にもかかわらず、受講者の方々の関心も高く、最先端の話題にご満足いただけたようです。

（企画情報部・塩谷 純）

キルギス共和国及び中央アジア諸国 における文化遺産保護に関する 拠点交流事業

文化遺産国際協力センターでは、キルギス共和国チュウ河流域の都城址アク・ベシム遺跡を舞台に、2011年度から文化庁委託事業としてドキュメンテーション、発掘、保存修復、史跡整備に関する人材育成支援を開始しました。中央アジア5カ国の若手専門家を育成し、将来的に中央アジア諸国の文化遺産保護に益することを目的としています。

今年度は10月6日から10月17日までの12日間、奈良文化財研究所およびキルギス共和国



考古測量実習

国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所と協力して、第1回ワークショップを実施しました。今回のテーマは、遺跡のドキュメンテーションに関するもので、具体的には、遺跡の測量に関する座学を歴史文化遺産研究所で行った後、アク・ベシム遺跡でトータルステーションを用いた遺跡測量を実習しました。ワークショップには、キルギス共和国の8名に加えて、他の中央アジア各国からも1名ずつ、計12名の若手専門家が参加しました。研修生はいずれも測量技術を身につけようと、熱心に研修を受講していました。また、この研修を通じて、中央アジア各国の若手専門家の間にネットワークが構築されたことも、重要な成果の1つだったといえます。

今後も引き続き、中央アジアの文化遺産保護を目的とした様々なワークショップを実施していく予定です。

（文化遺産国際協力センター・安倍雅史）

バーミヤーン遺跡の保護に 関する専門家会議及びシンポジウム

＊第10回バーミヤーン遺跡保存専門家会議＊

東京文化財研究所は、UNESCO、そして国内外の研究機関と連携して、アフガニスタンにおける文化遺産の保護事業を長年率

引してきました。とくにバーミヤーン遺跡の保護活動は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金「バーミヤーン遺跡保存事業」を核として、アフガニスタン、そして各国の研究機関が協力して実施されています。あわせて、このバーミヤーン遺跡の保護活動に関し、各国の専門家間で成果を共有し、保存と活用の方針を議論するための専門家会議を毎年開催しております。本年は、東京文化財研究所とユネスコとの共催で、12月6日から8日にかけて、東京文化財研究所でこの専門家会議を開催しました。

日本、アフガニスタン、ドイツ、フランス、イタリアの各国、およびUNESCO、ICOMOS、ICCROM等国際機関から専門家が参加しました。壁画の保存や大仏の破片の保護といった継続的な課題に加えて、谷全体に視野を広げ、広域に分布する考古遺跡の調査や景観の保護の問題、博物館や観光面でのインフラ整備に関しても議論しました。

＊国際シンポジウム「大仏破壊から10年

世界遺産バーミヤーン遺跡の現状と未来」＊

文 化遺産国際協力センターは、文化遺産保護分野における日本の協力やその方向性を考えるために、アジアの各地域を対象として国際会議を実施しております。本年は、アフガニスタンにおけるバーミヤーン大仏の破壊から10年という節目を迎えることから、日本をはじめ、各国が協力して実施している「バーミヤーン遺跡保存事業」の成果を総括し、またその活動を広く一般に公表すべく、国際シンポジウムを開催しました。シンポジウムは、12月9日（奈良文化財研究所と共催、於東京国立博物館平成館大講堂）、および12月11日（奈良文化財研究所、龍谷大学アジア仏教文化センター・龍谷ミュージアムと共催、於龍谷大学ヴァンティ響都ホール）に開催されました。

これまでは、破壊された大仏の再建問題や大崖の仏教石窟に関心が集中していましたが、近年の開発にともなう谷全体の遺跡の保護や景観保護についても問題を提起し、バーミヤーン遺跡保護における課題と今後の日本の国際協力について皆さんと考える有意義な機会となりました。

＊アフガニスタン情報文化大臣の招へい＊

東 京文化財研究所は、文化庁による「外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」の枠組みにおいて、アフガニスタン・イスラーム共和国より、サイイド・マフドゥム・ラヒーン情報文化大臣を、12月4日から8日にかけて招へいしました。

ラヒーン大臣は、12月5日、中川正春文部科学大臣を表敬訪問し、これまでの文化遺産保存に対する日本の協力に感謝の意を述べるとともに、今後の継続的な日本の支援を求めました。6日には、「バーミヤーン遺跡保存事業専門家会議」に参加し、日本および各国が実施するアフガニスタンの文化遺産保護活動の最新の成果に関して意見交換を行ったほか、東京藝術大学が実施したバーミヤーン仏教石窟壁画片の保存修復成果を見学しました。さらに、日本を代表する木造建築遺産である日光東照宮において、日光社寺文化財保存会の



東京藝術大学における
バーミヤーン壁画片の保存修復成果見学

協力を得て修理現場を見学しました。

以上の活動を通じて、ラヒーン大臣から日本が行う文化遺産保存修復協力に対して、きわめて高い評価と賛辞を得ることができました。同大臣の招へいは、未だに内戦が続くアフガニスタンにおける今後の文化面での復興にむけて、日本との協力関係をさらに緊密にする機会となりました。

(文化遺産国際協力センター・鈴木 環)

熊本における 第16回資料保存地域研修の開催

表 題の研修会を11月16日、17日の2日間、熊本市現代美術館において開催し（主催：東京文化財研究所・財団法人熊本市美術文化振興財団、後援：熊本県博物館連絡協議会・熊本市町村文化財担当者連絡協議会）、68名が参加しました。

本研修は、我々が地方に出向き、学芸員や文化財行政担当者を対象に資料保存に関する基礎知識を学んで頂くことを目的としており、総論、温湿度、照明、空気環境、および生物被害管理などに関する講義を行うものです。当研究所では毎年夏、「保存担当学芸員研修」を2週間にわたって行っていますが、長期におよぶ参加がかなわない方にとって、この地域研修は保存を学ぶための貴重な場となっています。

今回ははじめて“現代美術館”における資料保存に関しての講義も行いました。現代美術館では、保存・展示環境などにおいて近代以前の作品を対象とした施設とは異なるコンセプトのもとで設計されていることが少なくなくありません。しかし一方、現代美術館でも国指定品を含む古典作品を扱う場合もあるため、その安全

な保存と展示のためには、担当者が施設の特徴を認識したうえで、適切な対処と取扱いを行う必要があります。また、現代美術作品も、将来的には歴史的・文化的な価値づけがなされる可能性があり、その保存についても、真剣に考えなくてはならない時期が来たとの認識がありました。現代美術については、我々も作品と施設の両方に対して、経験や研究の蓄積が十分であるとは言えません。だからこそ、現場で扱う方からのニーズを積極的に知らせて頂きたいとの思いもあり、これを取り上げるに至ったものです。

(保存修復科学センター・吉田直人)

横山大観《山路》 (永青文庫蔵) 本紙裏面からの調査

東 文研ニュース44号でもお伝えしたように、企画情報部では研究プロジェクト「文化財の資料学的研究」の一環として、横山大観《山路》の調査研究を永青文庫と共同で進めています。同文庫が所蔵する大観の《山路》は、明治44年の第5回文部省美術展覧会に出品され、大胆な筆致により日本画の新たな表現



横山大観《山路》(永青文庫蔵)
本紙裏面の撮影の様子

を切り拓いた重要な作品です。昨秋の調査の後、同作品は九州国立博物館の文化財保存修復施設で修理をすることになりました。表具を解体、裏打ち紙を除去して、絵具ののった絹地（本紙）の裏面があらわになったのを機に、同博物館および修理を担当する国宝修理装飾師連盟のご高配・ご協力を得て12月9日に再調査を行いました。裏面から薄い絹地を透かして画面を見ることで、表からではわからない制作過程がうかがえます。とくに本作品で特徴的な、紅葉をあらわす茶褐色の顔料は一見、後から点じられた筆致のように見えますが、裏面からの調査によって、本画制作のかなり早い段階で塗られていることがわかりました。

今回の調査は永青文庫の三宅秀和氏、《山路》が寄託されている熊本県立美術館の林田龍太氏、これまでの調査に参加されてきた東京藝術大学の荒井経氏・平論一郎氏、そして当研究所の城野誠治と塩谷で行いました。城野が本紙裏面の高精細による撮影を行いました。こうした修理途中の作品の調査撮影は稀であり、解体しなければ見ることで見えない本紙裏面の画像はきわめて貴重な資料となるはずです。

（企画情報部・塩谷 純）

東京国立博物館本 国宝・虚空蔵菩薩像の調査・撮影

企画情報部の研究プロジェクトのプロジェクト「文化財デジタル画像形成に関する調査研究」の一環として、10月5日、東京国立博物館に所蔵される国宝・絹本着色虚空蔵菩薩像の高精細画像の撮影を行いました。東京国立博物館の理解・協力をいただいていた当研究所との「共同調査」によるものです。今回の撮影は東京国立博物館の田沢裕賀氏のご助力を



虚空蔵菩薩像の高精細画像撮影の様子

えて、当研究所画像情報室城野誠治が画像撮影を行い、小林達朗、江村知子が参加しました。虚空蔵菩薩像は平安仏画の代表的名品のひとつです。平安時代の仏画は日本絵画史の中でもきわだって微妙かつ細部にわたる繊細な美しさを実現しましたが、それゆえにその表現の細部の観察が重要になります。今回は本作品全体を現在の最高水準の高精細で28カットに分割して撮影し、またさらに微細な部分8カットのマクロ撮影を行いました。結果は肉眼による観察を超えるものがあります。得られた情報については今後東京国立博物館の専門研究員を交えて共同で検討してまいります。

（企画情報部・小林達朗）

越天楽今様の復原

「越天楽」、といえば現在ではもっぱら結婚式場で流れる雅楽曲、あるいは民謡の「黒田節」として親しまれていますが、鎌倉時代にも寺院を中心に親しまれていました。雅楽は元来器楽ですが、越天楽のメロディは日本人の琴線にふれるところが多かったのでしょう。さまざまな歌詞をあてて歌われたのです。これを「越天楽今様」、と呼んでいます。

能は室町時代のはじめに世阿弥が大成した演劇ですが、能のなかには、他の芸能を取り込んで見せ場とする作品があります。たとえば、雅楽の楽人の妻を主人公とする「梅枝」では妻が昔を偲んで舞を舞う前に「越天楽今様」の歌詞を挿入しています。現在では謡のメロディが変化して「越天楽」には聞こえませんが、桃山時代のメロディを復元すると「越天楽」のメロディが浮かび上がってきます。観世流の鍬仙会では12月の公演で「梅枝」をとりあげましたが、高桑が協力して「越天楽今様」の古い旋律で上演しました。能の古い演出を研究テーマのひとつとする高桑の研究成果を通して、雅楽と能の音楽が、ジャンルを越えて交流していたことが実際の舞台で実証されました。

(無形文化遺産部・高桑いづみ)

秋田県仙北市における 茅葺き技術の調査

10月中旬、秋田県仙北市で茅葺き技術の調査を行いました。茅葺きはススキ、ヨシ、カリヤス等の植物材によって葺かれた屋根の総称で、民家や寺社建築の伝統的形態の一つです。高度経済成長期以降、茅葺き屋根をめぐる技術・景観・文化は急速に失われており、高齢化にともなう職人の減少や茅材料の不足が衰退に拍車をかけています。

調査では茅葺き職人の後継者育成や技術の記録保存等の事業を行っている「秋田茅葺き文化継承委員会」の案内により、職人への聞き取りと技術の実地調査を行いました。茅葺き屋根を維持する技術には、大きくわけて「葺き替え」（茅を全面的に葺き替える技法）と「差し茅^{さきがや}」（痛んだ茅を差し替える技法）がありますが、秋田を含む東北日本海側の茅屋根はそのほとんど



差し茅を行う職人

どが「差し茅」によって維持されるという点で、全国的にみても特徴的です。

研究では差し茅技術の特徴を調査・記録していくと共に、これを一つの民俗技術と捉え、その文化的意義を明らかにしていきたいと考えています。

(無形文化遺産部・今石みぎわ)

茨城県日立市十王 「ウミウの捕獲技術」の調査

11月上旬、茨城県日立市十王町にて「ウミウの捕獲技術」（日立市無形民俗文化財）の調査を行いました。春に震災被害の調査を兼ねて同地を訪ねてから、2回目の調査です。今回はちょうど秋の鵜捕りシーズンに当たっており、実際の捕獲の様子も調査・記録することができました。鵜捕りは、囀の鵜を用いて飛来する鵜をおびき寄せ、長いカギで引っ掛けて捕獲するものです。捕獲された鵜は、嘴をハシカケと呼ばれる専用の道具で固定して竹かごに入れ、依頼のあった全国の鵜飼地へ輸送



15メートルの断崖にある
トヤ（鵜を待つ小屋）と囀の鵜

されます。今秋は囀の鵜3羽を含む、19羽が捕獲されました。

今回の調査では、たまたま1羽の鵜の捕獲に立ち会うことができましたが、何日待っても1羽も飛んでこない時もあるということで、鷹の捕獲技術やマブシ猟などと同じく、待ち伏せを基本とする古い狩猟の形態をよく保存しています。質のよい鵜だけを見極めて獲る必要があること、大量の捕獲の必要がないことなどから選択・継承されてきた捕獲方法といえます。しかし逆に、鵜捕りだけでは生業として成り立ちにくいことから、後継者不足もひとつの課題になっています。全国の12の鵜飼地において用いられる鵜は、ほとんどすべてがこの場所で捕獲されたものであり、鵜飼の伝承を下支えするものとしても重要な意味を持つ民俗技術です。今後、技術の伝承を支えていくための、さらなる保護が必要になってくるものと思われます。

（無形文化遺産部・今石みぎわ）

アンコール遺跡群での 現地調査と覚書の更新

12月、カンボジアのアンコール遺跡群での現地調査と、東文研・奈良文化財研究所（奈文研）およびアンコール地域遺跡整備機構（APSARA機構）との覚書の更新を実施しました。

アンコール遺跡群での活動の目的は、石材の保存にとって適切な環境条件を解明することです。石材の生物による劣化はアンコール遺跡群における共通の課題であり、生物の種類によって石材に及ぼす影響は異なると考えられます。しかし、環境と生物の種類との関連について、分類学的内容を含む調査研究を行っている団体は少ないのが現状です。東文研では、環境条件と石材表面に生育する地衣類、蘚苔類、藻類などの種類との関連を明らかにし、それらの生物が石材に及ぼす影響を定性的・定量的に評価するための調査研究を実施しています。今回、日本および韓国から地衣類の分類学的研究の専門家、イタリアから植物生態学および文化財の生物劣化の専門家にも参加していただき、これまで継続的に調査を行っているタ・ネイ遺跡をはじめ、タ・ケオ、タ・プローム、バイヨンなど、環境が異なる周辺のいくつかの遺跡で調査を行いました。現在は各研究者が現地調査で得られた情報の解析を行っています。また、タ・ネイ遺跡では、付近の採石場から切り出した石材試料を遺跡に長期間設置して表面状態の変化の観察を行ったり、過去の保存処理実験の経過観察を行ったりしています。

現地調査に引き続き、アンコール遺跡群での共同研究に関するAPSARA機構との覚書を更新しました。従来、覚書は東文研と奈文研がAPSARA機構との間でそれぞれ取り交わして



石材上の生物の種類と環境条件に関する調査

いました。今回から、同じ地域で活動する両文化財研究所の連携を深めるため、三者の間で締結することとなり、シエムリアップにあるAPSARA機構の本部で東文研の亀井所長、奈文研の井上副所長とAPSARA機構のブン・ナリット総裁による調印式を実施しました。今後は、修理事業が予定されている西トップ遺跡でも保存整備のための調査研究を行います。

(企画情報部・二神葉子)

企画情報部研究会の開催 大村西崖の研究

大村西崖（1868～1927年）は明治中期に美術批評家として活躍し、その後半生には東京美術学校教授として東洋美術史学の発展に大きく貢献した人物です。2008年に西崖のご遺族より東京芸術大学へ日記・書簡等の資料をご寄贈いただいたのを機に、翌2009年より科学研究費による「大村西崖の研究」を、塩谷純（東京文化財研究所）を研究代表者として進めています。10月18日には今年度の第7回企画情報部研究会として、その研究成果の発表を行いました。

塩谷は「大村西崖と朦朧体」と題して、西崖の美術批評と明治中期の日本画との関連を探り

ました。西崖は横山大観や菱田春草らの革新的な日本画を“朦朧体”として批判した人物として知られていますが、あらためてその批評を読むと、日本画の線や筆法への忌避感を露わにし、あたかも朦朧体に連なるかのような論調であることは注目されます。発表は、そうした西崖の批評の再検証を通して、“描く”絵画から“塗る”絵画へと変貌する近代日本画の流れを展望しようというものでした。

続いて大西純子氏（東京芸術大学）が「大村西崖撰『支那美術史雕塑篇』について（資料紹介）」と題して発表を行いました。大正4（1915）年に刊行された大村西崖撰『支那美術史雕塑篇』は、中国の彫塑全体を網羅した最初の資料集で、今日も多く中国彫塑史研究者が便とし、研究書としての価値は失われていません。大西氏は、東京芸大に寄贈された資料の中から西崖自身による校訂本や手記等を紹介、西崖が行った調査や参考にした文献を明らかにしながら同書編纂の経過をたどりました。

発表後のディスカッションでは、西崖研究の第一人者である吉田千鶴子氏（東京芸術大学）をはじめ所内外の研究者が参加し、活発に意見



大正10（1921）年、美術史研究のため中国へ渡った折の大村西崖

を交わしました。とくに大西氏の発表からうかがえた西崖の実証的な姿勢に、同じ研究者として共感を寄せた方も少なからずいたようです。

(企画情報部・塩谷 純)

**「諸先学の作品調書・画像資料類の
保存と活用のための研究・開発—
美術史家の眼を引継ぐ」
科研中間報告会の開催**

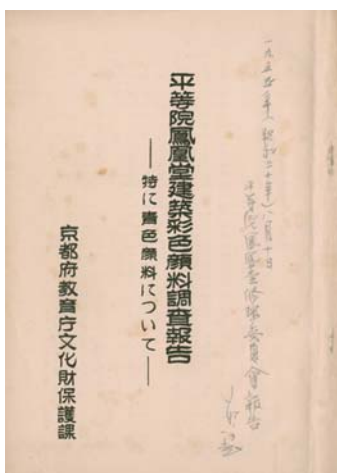
12月20日に企画情報部研究会として、標題の科学研究費研究課題（代表者：田中淳）の中間報告会を開催しました。当研究所には、かつての業務で使用した資料や、元職員のご遺族などからご寄贈いただいた調書や写真などが数多く保管されており、研究資料として保存と活用を進めています。また従来の美術史研究では見過ごされてきた関連資料なども積極的に活用して、研究を推進しています。対象とする資料は、刊行物のように分類・管理が容易なものばかりでなく、肉筆のメモやスケッチ、会議や研究会の配付資料、35mmスラ

イド、16mmフィルムなど、実に多種多様なものが含まれています。これらは整理が難しく、他の美術館・博物館や図書館、大学などの組織では敬遠されてきた資料とも言えますが、稀少性の高いものも少なくありません。標題の研究課題は2009年度から4カ年の計画で実施し、今年度は3年目にあたります。企画情報部員や客員研究員によって、数多くの資料を分担して、整理とデジタル化を進めています。今回の中間報告会では次のようなタイトルで、各資料の分担者が報告を行いました。

江村知子「「昭和の古画備考」—田中一松資料を今後の研究に活用していくために」、皿井舞「久野健資料について」、三上豊（和光大学・当部客員研究員）「現代美術資料—画廊等のDM・目録等の整理と今後の課題」、中野照男（客員研究員）「柳澤孝資料について」、綿田稔「田中助一資料について」、田中淳「田中敏男資料について」

また、資料ごとにデータベースが林立し、文化財アーカイブとしての全体像が見えにくいという問題を解決するために、当研究所で現在運用中の書籍・展覧会カタログ・美術文献・写真原板などのデータベースと、田中一松・久野健・梅津次郎の各資料の基礎データを統合させたデータベース（総数約635,000件）を試作してデモンストレーションを行いました。様々な形態で存在している研究資料を一括して検索できるばかりでなく、複合的に進行している研究動向を浮き彫りにすることができ、専門的アーカイブの新たな方向性として有効です。より精度の高い情報ツールとして運用していくためには多くの課題がありますが、さまざまな研究において活用できる文化財アーカイブの構築をめざしていきたいと思います。

(企画情報部・江村知子)



京都府教育庁文化財保護課『平等院鳳凰堂建築彩色顔料調査報告—特に青色顔料について』（田中一松資料）、昭和30年（1955）8月10日に行われた平等院鳳凰堂修理委員会での資料。今回のデータベース試作段階において明らかになった資料で、「代用群青」という用語の初出例と見られる。

刊行物のご案内



『国宝 彦根屏風』

近世初期風俗画の代表的作品「彦根屏風」の調査報告書。当所は2カ年にわたり所蔵者の彦根城博物館と共同調査を行いました。高精細画像、近赤外線画像、蛍光画像など各種画像と、彩色材料分析結果を掲載し、本作品の表現に迫ります。2008年、中央公論美術出版(03-3561-5993)、定価27,300円



『黒田清輝フランス語資料集』

黒田清輝の未公開の手紙控えと日記(仏語、1888年)と、黒田宛欧文書簡を翻刻、和訳して、原文とともに収録した資料集です。2009年、中央公論美術出版、定価18,900円



『東大寺修二会の構成と所作』

無形文化遺産部の前身、芸能部の紀要『芸能の科学』の6.7.12.13巻として発行された同書が、復刊されました。佐藤道子研究員(現名誉研究員)が1967年から72年にかけて行った東大寺修二会の調査記録で、作法の次第、内容が詳細に記録された本書は、法会研究の嚆矢となっています。全4巻、2005年、法蔵館(075-343-5656)、揃58,000円



『文化財の保存環境』

本書は、博物館法施行規則の改正に伴って平成24年4月より大学における学芸員養成課程に新設される「博物館資料保存論」を受講し、学芸員資格の取得をめざす学生が、文化財保存に関わる科学的な基礎知識を身につけることを目的に執筆したものです。2011年、中央公論美術出版、定価1,995円



『未来につなぐ人類の技5—大型構造物の保存と修復』

「未来につなぐ人類の技」シリーズの第5巻目。ダム、橋梁、トンネル、ドック等土木構造物の保存修復の国内外における実例を調査し、その実際と問題点および解決の試みを紹介します。2006年。



『カフカハ遺跡群の図面と出土品(土器と木彫)』

タジキスタン共和国北部に位置するカライ・カフカハI、II遺跡、チリフジラ遺跡(5～9世紀頃)に関する資料集。研究所が所蔵するアーカイブのうち、遺跡の図面、出土した壁画や土器、木彫刻等の模写や写真を収めています(日・英・露語)。2011年。

Column 《文化財修理に用いられるフノリについて》

文化財修理に用いられる接着剤の一つにフノリという海藻由来の材料があります。フノリは布海苔や布糊とも書き、原料は紅藻類と呼ばれる赤い色の海藻であり、潮間帯に繁茂します。古くから食用や糊料に用いられ、平安期には既にその名の記録が残っています。主な用途は染織品の糊付けや洗いや張りであり、これらは布に関連することからそれが名前の由来にもなったのではないかと考えられています。ただ、古くから用いられている材料であるため、それ以外にも用途は多岐に渡り、食料や、漆喰塗りの際に混ぜる糊料、陶磁器の絵付け、載金、また洗髪などにも用いられていました。これらの用途は整理すると、やわらかな接着剤、増粘剤、洗浄剤の3種類に分類されます。このことは、フノリが様々な機能性を持つことを示しており、それぞれの機能がどのような化学的性質に由来するのかはまだわからないことが多く、化学的に興味深い研究対象です。



乾燥フノリ

フノリと一般的に言われているものにはマフノリ、フクロフノリ、ハナフノリの3種類があります。いずれも紅藻類フノリ科フノリ属に属し、これらを採集した後に漂白して乾燥したものが市場に流通しています。この乾燥フノリには前述の3種類が混在しており、特に分別しないまま用いられています。糊料として用いる場合には、これに水を加えて煮溶かした上で濾過した抽出液を使います。



一枚の乾燥フノリから分別したマフノリ（左）、ハナフノリ（中）、フクロフノリ（右）

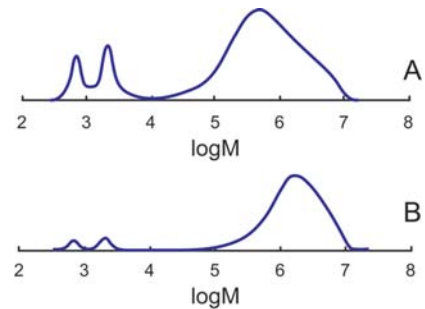
現在、日本の文化財修理でフノリを用いるのは、主に絵画修理での用途が多く、使用目的は大きく二つに分けられ、絵画表面の一時的な保護（表打ち）と、膠やデンプン糊といった他の接着剤に混ぜる増粘とが挙げられます。表打ちとは、修理の際に表面を一時的に保護する作業で、作業後に確実に剥離する必要があります。フノリは水への高い溶解性があるため、作業後に水で容易に剥離させることができることから、この用途に用いられています。水に溶けるものは私たちの身近に多いため、水に溶ける性質というものは当たり前と考えがちですが、接着剤に限ると水に再溶解するものはそれほど多くありません。そのため、フノリの水に対する高い溶解性は修理現場で高く評価されています。一方、増粘性は修理の作業において、作業効率や浸透性に大きく影響します。フノリは、小麦デンプン糊や膠溶液に少量でも添加すると大きく粘度が上昇し、しかもゲル化（凝固）しにくいという性質があるため、文化財修理のみならず伝統工芸の中では増粘用途で用いられることも多いようです。このように、絵画の修理に限っても複数の用途があるフノリですが、実は粘度や接着力などが調製のたびに異なるという一面があります。そのため、安定したフノリ抽出液を得るためにフノリに関する科学的な調査を進めています。



フノリを使った表打ち作業

フノリは場所により繁茂しやすい種類が異なるため、前述した3種類のフノリの混ざり具合は産地により異なります。また、海藻であるため、その生活環（ライフサイクル）を考えると採取した時期によって抽出される成分が異なると考えられます。さらに、漂白の方法、抽出の温度や加熱時間の長さにより、抽出される成分が異なるため、これら複合的な要因が重なり、フノリの抽出物の物性に影響を与えていると考えられます。現在、これらの要因を確認するため分析や調査を行っています。

まず、実際の修理作業現場において調節しやすい要素として抽出温度に着目し、その違いが抽出されたものの性質にどのように反映するかを確認しました。フノリを洗浄後そのまま室温で水に浸して濾過した試料と、従来通り加熱して炊いて濾過した試料とを調製し、これらの分子量や粘度、接着剥離強度を比較しました。その結果、重量平均分子量では前者は130万程度、後者は230万程度という結果が得られ、粘度についても11.5 mPa・s、121 mPa・sと大きく異なることが明らかになりました。これは、抽出時の温度により抽出成分が異なることを示しています。一方でほぼ同じ濃度で紙を接着した試料の剥離強度については、1.45 N/mm、0.90 N/mmと、むしろ加熱しないフノリの方が大きい値を示しました。このことから、加熱せずに抽出したフノリについては、その分子量や粘度の低さゆえに作業後除去しやすいという性質を活かした表打ちに向いていると考えられ、増粘剤としては粘度の高い加熱したフノリが適していると考えられます⁽ⁱ⁾。ただし、実際に表打ちの作業に使用してみると、室温で抽出したフノリについては、高い濃度で用いないと作業中に剥離しやすいという傾向も見られ、科学的に確認した性質を活かす場合には、作業を行う修理現場との情報交流が欠かせないことが再認識されました。



上段：室温で抽出したフノリ
下段：加熱して抽出したフノリ

また、フノリの種類による性質の違いについても明らかになりつつあります。マフノリのみを抽出した場合には、フクロフノリやハナフノリより粘度や分子量が高いことを確認しています。さらに、採取時期による成分の差異についても現在調査中です。

食用のフノリについては、「寒ふのり」と呼ばれる寒い時期に採取されたものがよいとされていますが、糊料のフノリはむしろ春以降に採取されたものが使用されているようです。これはフノリ你的生活環境と大きく関係しており、食用には成長途中のもの、糊料に使うフノリは十分に成長したもの、という使い分けがあるのではないかと推定しています。糊料のフノリの主成分は細胞壁から抽出するため、抽出に適したフノリが採れる時期が選ばれていると考えられます。

フノリの主成分はガラクトンという多糖類に硫酸基が結合したもので、フノランと呼ばれています。このフノランにも複数の種類があることが明らかにされており⁽ⁱⁱ⁾、前述した抽出条件の差異による物性の違いは、おそらくこのフノランの種類の違いと思われます。現在、これらの点について明らかにするために、現地での調査や化学分析を行っており、得られた成果を修理現場での安定した材料使用に活かしていく予定です。

(保存修復科学センター・早川典子)

(i) 早川典子、荒木臣紀、貝沼諭、田畔徳一、川野辺渉：文化財修復材料としてのフノリ抽出物の特性、文化財保存修復学会誌 48 号、pp.16-32(2004)

(ii) Ryo Takano, Kaeko Hayashi, Saburo Hara, and Susumu Hirase: Funoran from the red seaweed, *Gloiopeltis complanata*: polysaccharides with sulphated agarose structure and their precursor structure, *Carbohydrate Polymers*, 27, pp.305-311 (1995)

Ryo Takano, Hiroko Iwane-Sakata, Kaeko Hayashi, Saburo Hara, and Susumu Hirase: Concurrence of agaroid and carrageenan chains in funoran from the red seaweed *Gloiopeltis furcata* Post. et Ruprecht (Cryptonemiales, Rhodophyta), *Carbohydrate Polymers* 35, pp.81-87 (1998)

人事異動

●平成23年11月1日付け

採用

文化遺産国際協力センター・アソシエイトフェロー・川口雄嗣

文化遺産国際協力センター・アソシエイトフェロー・田島さか恵

●平成23年12月31日付け

退職

文化遺産国際協力センター・特別研究員・影山悦子

所長表敬訪問（海外）

年月日	来 訪 者
23. 11. 25	モンゴル国際遊牧文明研究所国際プロジェクト・コーディネーター教授 A・オチル氏
23. 12. 8	ベトナムハノイ市人民委員会・タンロン・ハノイ遺跡保存センター所長グエン・バン・ソン氏 他 9 名

黒田記念館公開日カレンダー

■公開日：木曜・土曜 午後1時～4時 入館料：無料

・4月14日（土）から5月27日（日）まで、富山県立近代美術館において巡回展を開催いたします。

・黒田記念館は、耐震工事のため4月12日（木）より閉館いたします。公開の再開日は、未定です。

March 3							April 4							May 5						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	1	2	3	4	5	6	7			1	2	3	4	5
4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12
11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19
18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26
25	26	27	28	29	30	31	29	30						27	28	29	30	31		

編集後記

●東日本大震災から1年が経ちました。1年経っても、世の中全体では震災前の状態とは程遠いように思います。一方で、震災対応の活動を総括する動きも現れました。地震国である日本において次の被害を防ぐには、蓄積した経験の記録を分析・発信することが必要ですし、そのような役割を担いたいと考えています。（企画情報部・二神葉子）

TOBUNKENNEWS no. 48

発行日：2012年2月28日

独立行政法人国立文化財機構

発行：東京文化財研究所

印刷：よしみ工業株式会社

編集：企画情報部